煌めく刃と白き翼の歌

GAU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煌めく刃と白き翼の歌

【Nコード】

N0785X

【作者名】

GAU

【あらすじ】

初心者殺しの迷宮に閉じこめられた駆け出し冒険者のクロード達。その迷宮で同じように閉じこめられた冒険者達と出会い、協力して脱出をはかるのだが……。

TRPG『アリアンロッド』の世界を駆ける冒険者達。

行く手に待ち受けるのは数々の冒険……？

そんな彼らの物語です

さあ、冒険の舞台が、君を待つ！！

第一話

「ひつく。ねえクロードお、わたし達、ここで死んじゃうのかなあ……。グズッ」

「そんなことは無え。俺が、守ってやる……」
しゃっくりあげる長い黒髪に白い翼の大柄な少女を、短めの金髪にバンダナを巻いた小柄な少年が慰めている。

しかし、その声には力が無く、弱々しい。
自分達の状況が、かなり絶望的であることを少年は知っているのだ。

おもむろに顔をあげ、奥にいる仲間へ視線を向ける。

「ウォレス！ そつちはどうだ？！」

「……ダメだ。カルロスはまだ……」
ウォレスと呼ばれた青年は、少し前まで仲間だったものの側でひざまづき、奥歯をかみしめる。

「……すまん。俺が守りきれなかったせいで」
そのつぶやきが聞こえて、バンダナの少年も悔しそうにうつむいた。

迷宮の罠にかかり、転送された先で子牛ほどの大きさの黒い犬に奇襲された彼ら。“バーゲスト”と呼ばれるその魔獣を、なんとか倒したものの、仲間のアコライトは打ち倒され、とどめを刺されてしまった。

罠の解除は少年の役割だった。両親から教えられた技術にあぐらをかいて、油断した彼は致命的な失敗をしてしまったのだ。

連動する罠を見落とし、パーティを危険にさらし、犠牲者まで出してしまった彼の悔恨は深い。

と、奥から響く声が聞こえてくる。

「……なにか、来る」

「ッ！」

顔をあげてつぶやきながら身構える少年の隣で、ウォレスも剣を構える。

そして、迷宮に“彼女”の音が響いた。

『ちよつとエルロイっ！ どうすんのよっ！』

『ミイナ落ち着いて？』

『そつだ。リルを見習って落ち着きたまえよ』

『あんですつてえ?!』

なにが待ち受けているのか分からない迷宮内で騒ぎ立てるなど、自殺行為にほかならない。

未だ若葉マークすら取れていない初心者の少年達ですらわきまえていることを出来てない声に、少年はやりきれない顔になる。

『む？ だれかいるようだ』

少し年配の声が聞こえ、足音が止む。絞られていたランタンの明かりが大きくなり、少年達を照らす。

「だれだっ?!」

誰何する女の声と、引き絞るような音が聞こえる。

少年は、隣のウォレスに目配せをし、彼が盾を構えてうなずくのを見てから口を開いた。

「……“遺跡の街”ラインの神殿に所属している冒険者だ。あんたたちは？」

「我々もラインの冒険者だ。どうやら同じ境遇のようだな。武器を下ろして話し合わないか？ ミイナ、弓を下ろしたまえ」

「けどっ!!!」

「下ろすんだっ！」

「!!!」

こねる女性を年配の男性の声が一喝する。その鋭さに、女性だけではなく、少年とウォレスも息を呑んでしまう。

しびしびと弓を下ろした彼女の姿に、その場の雰囲気も幾分和らいだ。

そして、年配の男性と思われる姿が近づいてくる。やがて背筋をピンと伸ばした、落ち着いた雰囲気のある年配の男性の姿が見え、その胸に下がった聖印に二人は軽く息を吐く。

だが、わずかに足を引きずるような彼の様子に、二人で顔を見合わせる。

「あなた、怪我を治さないのか」

思わず訊ねたウォレスに、男性は笑みを深くした。

“アコライト”の職能についているものならば、大抵は癒しの魔術が使えるものだ。聖印を下げている以上、“アコライト”であることは間違いないはずなのだが、怪我をそのままにしている理由が分からなかった。

「はは、これは古傷だね。ふつうの癒しではまず治らんだ。これが元で一度は冒険者を引退したんだが、古い知り合いに頼まれてね。彼女らに付き添うことになってしまった。ん？　そういえば自己紹介がまだだったね。大変失礼をした。私はエルロイ・ハーゼイ。エルロイで構わんよ。今はしがない“アコライト”だ。昔とった杵柄で“サムライ”の技術の心得もあるが、もはや満足に刀を振ることも出来ん老いぼれだよ」

言いながら苦笑いを浮かべるエルロイ。そのまま首を巡らせると後ろの二人に合図をした。

すると姿を現したのは、弓を背負った長い赤毛をポニーテールにした女性と、褐色の肌にはポリウムのあるコゲ茶色の髪を三つ編みにしたあどけない容姿の女の子だった。

その二人のうち女の子の方が一歩前にでてお辞儀をする。

「初めまして、リル・ナルセイタです。ネヴァーフの、炎術師ですが、体も鍛えてますので体力には自信がありますよ」

柔らかな笑みを浮かべながらも力こぶを作ってみせるリル。その二の腕にはきっちり筋肉の盛り上がりが見て取れた。

ついで、少年達が女性に目を向けると、彼女は眉根を寄せる。

「……なによ」

「ミイナ、きちんとご挨拶しませんと」

少年とウォレスをやぶにらみする女性をリルがたしなめる。

容姿は幼いが、リルの立ち振る舞いは成人女性のものだ。彼女の種族でもあるネヴァーフは、“大地の妖精”^{ドワーフ}とも呼ばれているのだが、この種族の女性は、一般的なヒューリン（標準的な人間）の子供に似ており、成人しても子供のように見えるのが特徴だ。したがって、リルも見た目より遙かに年上なのだろう。ちなみに男性は小柄がっしりした体格に髭が生えている。

さて、そんなリルにたしなめられた女性だが、少年達に対してそっぽを向いてしまう。

それを見て深く嘆息するリル。
すると。

「ミイナ。ミイナ＝サーシエル。戦士よ」

と、つぶやくように名乗った。

それを聞いてリルは嬉しそうにうなずき、エルロイも目を細める。そして今度は少年が一步前に出た。

「俺はクロード。クロード＝レイドリック。盗賊だ。で……」
懐に手を突っ込んで何かを取り出した。

「こいつが相棒のメルセデス。俺の使い魔だ」

広げた手のひらに乗っているのは一匹のハムスター。後ろ足で器用に立ち上がり、お辞儀をする。

それをリルとミイナがのぞき込んだ。

「使い魔……ということとは、クロードさんは召喚術をお使いになるんですか？」

不意にリルから訊ねられて面食らうも、すぐに苦笑いを浮かべるクロード。

「いや、まだまだだよ。今はメルセデスに攻撃して貰うくらいが関の山ね」

その言葉に反応し、メルセデスが右前足で、己の胸をたたく。その仕草を見て、ミイナ軽く頬を染めた。

「か……可愛い……」

「はは、で、こっちの戦士が……」

ミイナの反応に苦笑いしつつ隣に立つ背の高い銀髪の青年を立てた親指で指すと、青年、ウォレスは軽く会釈した。

「ウォレス、アーセトンだ。エルダナーンの戦士だ」

「エ、エルダナーンの戦士?!」

ウォレスの自己紹介を聞き、メルセデスを愛でていたミイナが目をむきながら彼を見た。

隣でリルも驚いたようになり、エルロイも小さく感嘆した。

彼らが驚くのも無理はなかった。本来、“森の妖精”^{エルフ}とも呼ばれるエルダナーンは、思慮深く温厚で、魔法に対する高い適性を持つ種族である。

反面、力が弱く、華奢な体つきからわかるとおり、あまり頑健ではない。戦士など、もっともエルダナーンに向かない職能なのだ。それを踏まえてミイナはウォレスを値踏みするかのようになめつける。

その視線に、ウォレスは向き合った。

「……なんだ？」

「……べつにいい？ あんたほんとに戦えるの？」

「……弓を主武器にしているエセ戦士に言われたくはないな」

「……なんですって？」

互いに毒を吐き、メンチを切り合い始めるミイナとウォレス。

そのやりとりに、リルとクロードが額に手を当てて嘆息し、エルロイも軽く頭を振った。

と、そのとき。

「ケンカはダメ……っ！」

五人の耳をつんざく声が響き、大きな羽音とともにミイナとウォレスは抱きつかれた。

「ちよつ?!」

「むぐつ?!」

ミイナとウオレスはその大きな体格に遜色無い力で抱きしめられ、もがくことしかできない。

それを眺めてクロードは大きなため息を吐いた。

「で、あれが俺の幼なじみのユーリカ」シエイラットン。見ての通りドウアンの天翼族だ。一応、風の魔術師って分類になる……のか？」

クロードによる疑問系の紹介に、リルもエルロイも首を傾げてしまふ。

そんな紹介を受けて、長い黒髪に緑のメツシュが入った白い翼の少女、ユーリカは満面の笑顔になる。

「はぁ〜い ユーリカ」シエイラットンです 歌うのが大好きです でも、魔法は苦手です」

そうやって自己紹介をしたユーリカの声に、ミイナが何とかホルドから抜けだしながら、翼の少女を見上げた。

「ぶはっ、ま、魔法が苦手って……あなた魔術師なんでしょうっ？」

何で苦手なのよっ！」

声を上げたミイナに、ユーリカがきよとんとなる。

「ふえ？ わたし、お勉強苦手だもんっ」

そう言っつてそっぽを向いてしまふユーリカ。

その姿にミイナは呆れを隠せず、クロードは額に手を当ててうっむいた。

そもそもユーリカの種族である“剛なる人”^{ハーディー}とも呼ばれるドウアン族は、エルダナンとは真逆の戦士に高い適性のある種族だ。

さらに細かく“有角族”^{セラトス}“牙爪族”^{ケイネス}“天翼族”^{オルニス}と細かく分類されはしても、適正したいは変わらない。

そんな種族が魔術師をする事自体が希有なのだ。

だがユーリカはそんなことは知らないとばかりにニコニコと笑顔を見せる。

そんな邪気のない笑顔を見せられ、ミイナは言葉に詰まってしまった。

「……や、やりにくいわね。この子……」

「まあ、たいがいのーてんきてマイペースだからな」

絞り出すようにつぶやいたミイナにクロードが同意するようにうなづく。

そんな中、ウォレスは一人、天に召されようとしていた。

第二話

仲間の一人が天に召されかけるといふ珍騒動もなんとかおさまり、双方の状況を伝え合う両グループ。

「ふむ。聞く限りでもこちらと状況は変わらんね」

顎に手をやりながら、銀髪オールバックにした壮年の男性、エルロイはそうつぶやく。

その様子に、小柄で金髪の少年クロードは消沈したかのようにうなずいた。

「はい。俺が罫の全容を把握しないうちに解除したせいでカルロスは……」

後悔をにじませたその声に、エルロイは聖印に手を当てつつ、瞑目しながら聖句をつぶやく。

「こんなことを言っても慰めにもならんだろうが、あの仕掛けはベテランでも引つかかる可能性が高い。ここを生き延び、これからの糧にしたまえ」

「……はい」 拳を強く握りしめながら力強くうなずくクロード。そんな彼の様子に、エルロイは微笑を浮かべる。

その時、横合いから声がかげられた。先ほどの騒ぎで窒息しかけた銀髪のエルダナン戦士、ウォレスだ。

「……それで、あんたたちはこれからどうするんだ？」

彼の言葉に、エルロイは再び顎に手を当て、軽く思案する。

「ふむ。もし良ければ協力してこの迷宮を脱出せんかね？ 君たちが良ければ、だが……」

「ちょっとエルロイ！ こんな弱そうな連中と手を組むって言うのっ？！」 エルロイの言葉に素っ頓狂な声を上げるのは、彼の仲間である長い赤毛をポニーテールにした女性、ミイナ。

それを聞いてエルロイは嘆息する。

「……ミイナ。実力的には君と彼らの力量は同程度だよ。それに我

々だけでは前衛が足りない。君だってわかっているだろう？」

「う……」

真面目な顔でたしなめられ口をつぐむミイナ。その横で焦げ茶の髪を三つ編みにした、まだ幼い感じのネヴァーフの女の子が苦笑いを浮かべる。

「そうですね？ ミイナ。それに^{エンゲージ}接敵されてしまったては、あなたも実力を発揮しきれないでしょう？」

「……」

外見は幼くとも、中身はミイナより年上であるリルはやんわりと彼女を注意する。

「わかつたら、クロードさん達に謝りませんとね」

「グ……」

リルに謝罪するように促され、顔を引きつらせるミイナ。

少し迷うように視線を宙にさまよわせてから、観念するように頭を垂れる。

「……わ、わかつたわよ！ 謝るわよ！」

ミイナは大きな声で承諾するとクロード達の前に立つ。

「え、えー、えと……その……あの……」

が、なかなか言い出せずに口ごもり、少し頬を赤らめさせながら両手の人差し指を突つつき合わせる。

「……そ、その……し、失礼なことを言って……悪かったわ……つてなによ」

広げた五指の先つちよをくつつけながら、少しぶつきらぼつに謝るミイナ。そんな彼女の様子にクロードが小さな笑みを浮かべると、それを見とがめたミイナがにらんできた。

「いや、何でもないよ。協力の件は、こちらにとつても願つてもないことです。よろしく願ひしますハーゼイさん」

やぶ蛇になつてはかなわないとばかりにクロードは話題を逸らし、エルロイへと頭を下げる。

そんな少年の姿に、エルロイは笑みを深くした。

「いやこちらこそよろしく頼むよ。それから私のことはエルロイ、と呼び捨てで構わんよ？ クロード君」

「え？ いやしかし……」

呼び捨てで構わないというエルロイに戸惑うクロード。

そんな彼の様子を好ましく見ながらエルロイは一つうなずくと笑い始めた。

「はっはっは、無理にとは言わんよ。好きに呼びなさい」

「は、はあ……」

そんな壮年の冒険者の姿にクロードは曖昧な笑みを浮かべることしかできなかった。

と、頭上から羽音が聞こえ、クロードの頭に柔らかい大質量がのっかる。

「ねえねえ、みんな何のお話してるの？」

180を越える長身に、緑のメツシユが入った黒髪の少女（？）
ユーリカは、広げていた翼を畳みながらクロードに体重を預けてくる。対して少年は150に満たない小柄な体格なりに足を踏ん張りユーリカを支えるのだが、その頭にはユーリカのわがままボディの産物が鎮座していた。

「……うらやましくなんかいいわよ。うらやましくなんかいいんだから……」

「あらあら」

そんなユーリカの“女の象徴”に、ミイナは憤まじやかな自分のそれを手で押さえつつ両目のハイライトを消しながらつぶやき、リルはそんなミイナから徐々に距離を取りつつ困ったような笑みを浮かべた。

だが、そこへ一人の男の言葉が投げ込まれた。

「……よくわからんな。なにがうらやましいんだ？」

そののたまったのはウォレスだ。彼の言葉に反応し、ミイナが殺気を向ける。

「……どーという意味よモヤシ戦士^{ウォーリア}」

「そのままの意味だ。第一邪魔だろうあんなに大きくては」
「……………」

殺意を向けるミイナへ真面目な調子で返すウォレス。
そんな彼に周囲の視線がなま暖かくなった。

「……なんだお前ら。その失礼な視線は」

困惑気味に周りへ言い放つウォレス。

その肩に手が置かれた。エルロイだ。

「？」

「君にもそのうちアレの良さがわかる時が来る」

「は？」

優しく諭す調子で言いながら、離れていったエルロイ。それを見
送りつつ戸惑うウォレス。

そんな彼をミイナは半眼で見ていた。

「じゃあ協力するとして、ギルドはどうします？」

ウォレスから離れて来たエルロイへ、クロードが声をかけた。

それに対してエルロイは、ふむとつぶやき顎に手を当てる。

どうやら思索するときの彼の癖のようだ。

「一時的に双方のギルドを解散して新たに六人で組み直す方が良い
だろうね」

“ギルド”とは、冒険者同士協力し合うためのグループである。

これにより、冒険者グループは円滑に活動を進めるわけだ。

この六人で協力しあっていくならば、ギルドを組むことは妥当と
いえる。

「そうですね。で、ギルドマスターはエルロイさんが……」

「いや、クロード君。君がやりなさい」

「は？」

エルロイの言葉に、クロードの目が点になる。

ギルドを統括するギルドマスター。クロードはもちろん経験豊富なエルロイが適任だと思っていたのだが、彼は違うらしい。

「いや、いや俺みたいな駆け出しより、エルロイさんみたいな経験豊富な人がやってくれた方が……」

戸惑いながらも言い募るクロードに、エルロイが首を振る。

「いや、私ももう年だしだ。それに冒険自体三十年ぶりだ。知識はあってもとっさの判断と決断の早さに欠けるきらいがある。現にこの罨にみすみすはまっているからね。むろん君のサポートは全力でさせてもらおうよ?」

クロードは、エルロイの言葉に気圧されながらも逃げ道を探してミイナ達を見やる。

「し、しかし、そちらのメンバーの意見も……」

そう言っつてミイナ達に水を向けると、リルは苦笑いをし、ミイナは明後日の方を向く。

「わたしは……その、あまり人に指示を出したりなどは得意ではありませんので……」

「あたしもパス。面倒だしね」

そう言っつてくる二人に、クロードは苦虫を噛み潰したような顔になった。

そんな彼にウォレスが声をかけてくる。

「まあ、もともとお前はうちのギルドのギルマスだったわけだからな」

兄貴分にそう言われ、クロードは観念したかのように嘆息する。

「……分かりました。謹んでお受けしましょう。ハア……。」

ため息をつきながら了承するクロード。

そんな彼を見てエルロイは小さく笑う。

「んじゃ、ギルド名はどうします?」

まず手始めにと言わんばかりにクロードが言つと、エルロイは顎に手をやった。

「ぶむ。二つのギルドの集まりであるから、双方の名前から決める

としないかね？」

「なるほど……それでいきましようか」

エルロイの提案に一つうなずいて周りを見回すと、ほかのメンバーに異論はないらしくうなずいてきたので了解するクロード。そのまま自分達のギルドが『蒼い流星』であることつげた。

これにうなずいたエルロイがミィナに目配せすると、ミィナは仕方がないという風に『龍鱗』というギルド名を名乗った。

「『蒼い流星』と『龍鱗』ですか……」

双方のギルド名をつぶやき、思案するクロード。わずかに悩み、不意に口を開く。

「安直ですが、二つをくつつけて『蒼き龍鱗』なんてどうでしょう？」

そんなクロードの言葉に、一同軽く思案し、肯定するようにならずいていく。

『いいんじゃない？』

『ですねえ』

『うんうん』

『そうだな、悪くない』

『ではそれで決定してしまおうとしましようか』

こうしてここにギルド『蒼き龍鱗』が結成された。この場を切り抜けるためだけに結成されたギルドではあったが、これがこの後長きにわたって彼らが所属することになるギルドの誕生であることなど、このときのクロード達には思いも寄らぬ事であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0785x/>

煌めく刃と白き翼の歌

2011年10月5日03時13分発行